

Saturday

-Correct Questions-

We color your everyday with something Saturday!

Progress Table

1. **Party** 『誠実な口約束』

2. **That Day** 『あこがれ』

3. **Decade** 『いつか晴れた日に』

4. **Only Use** 『アイスクリームが溶けるまで』

5. **Just In Case** 『お誘い合わせの上』

6. **Sorry, but no sorry** 『お気に召すまま』

1. Party III

誠実な口約束



All Cast



「誰よ、雨女は」

ピカピカの窓ガラスをわざとらしくシャツの袖で拭つて、楓がおおげさにため息をついた。楓はため息もうるさい。でも窓の外は、たしかにそうやつて犯人捜しをしたくなるくらい、すごい雨だ。

きゅきゅつと音がした窓ガラスは一切の曇りなくつるつるで、雨の向こうに、ぼんやりとシルエットがにじんだ東京タワーが見える。だいたいこの部屋は、マンションなのにやたらしつかりしたベランダがついていて、よっぽど斜めに雨が降り殴らない限り、リビング一面のおつきな窓ガラスがぐしゃぐしやに濡れることはない。

「貴重なお花見どきの休日が、まあ見事などしやぶり」

もう一度きゅきゅつと窓を拭い、わざとらしく仮面を作つた楓は、ソファードクツーションに埋もれている千海に責任とコーラを放り投げる。

「千海でしょ、雨女は」

「わつ」

抱えていたクツーション越しに慌てて手を伸ばし、ペットボトルを捕まえた千海が、

おおいに不満そうな声を上げた。

「だから炭酸を投げないでくださいよ！ 信じられない」

ふたりがいつしょに仕事をしているところはあんまり見たことないけれど、こうやつて土曜日に会う限り、楓はいつも千海をからかっている。葉子にそう言つたら、あれはもはや絡んでるのよ、つて言われたけど。どうやら、単にからかっているよりも性質が悪いらしい。

「ひどい。楓さんってなんでも私のせいにしますよね」

月果、来年はぜつたいこの人抜きでお花見やろうね、と言われて、いいよと頷く。

「だつて、よくべしょべしょ泣いてるじやない」

「いつの話ですか！」

千海が真っ赤になつてクッショーンを投げる。それを片手でキヤッチし、余裕綽々の笑顔で、楓はひらひらと空いている方の手を振つた。

「えー、いつだろうね。具体的に言つてもいいの？」

「うるさい！」

「おやおや。威勢がいいわね。なあに、年度が替わつたらとたんにいつちよまえのつもり？」

こうして端から見て いる分にはけつこう楽しそうなのだけれど、一回うつかりその感想を口にしたら、千海がにつこりして、自分のチョコミニントアイスと月果のチョコレートアイスを勝手に交換した。月果がチョコミニントを忌み嫌つてるのは、千海だつて知つてゐるはずなのに。

それにも、月果といつしょのときにはやたらお姉さんぶる千海は、こうしてこのメンバーで集まつて いるとずいぶんと子どもっぽく見える。その大半は千海より更に言動が子どもっぽい楓といつもやりあつて いるせいだと思う。ぶんすか、という音が聞こえてき うな大きさに頬を膨らませて、ピンクのニットを着た後姿が、すたすたと窓の傍まで歩いて行く。

「それにこれ、雨つて いうより嵐ですよ。楓さんが暑苦しいから、早めに台風が来ちゃつたんじゃないですか。全国何十万のお花見ラバーに謝つた方がいいですよ」

それから場所取りをして いる新入社員にも！ と、雨で東京タワーがかすむ窓の前で、千海は腕を組んでみせた。楓はそれを、片眉だけ上げて見下ろして いる。どつちもどつちだなあ、と思つてたら、子どもの口喧嘩の仲裁にぴつたりの人物がキツチンから声をかけてくれた。

「そこのうるさいの二人。じやああつてないで手伝つて」

慌てて組んでいた腕をほどき、千海がとつてもいい返事をする。

「あ、はーい。吉野先生」

そうしてひそひそと隣に立つた背の高い女の人の二の腕をつつく。

「呼ばれますよ、楓さん」

「あんたと月果じやないの」

突然ボールを投げられ、きょとんとしてしまう。ぜつたい楓と千海のことだと思う、と反論する前に、キツチンから桔梗が補足してくれた。

「千海、いい返事もいいけど、その横のでかいのを引っ張ってきて」

「はーい。今行きます」

でかいの、と呼ばれた楓は白を切るのも諦めたらしく、自分だつてたいして小さくないじやない、とぶつぶつ呟いて、くるりと窓に背を向ける。そのまま大人しくキツチンへ向かうのかと思つたら、諦め悪く、既に歩き出そうとしている千海の腕を掴んでぎゅつと自分の懷に引き寄せた。

「わ」

「千海瑠菜はさー、そうやつて先生の前ではぶりっこをするのよね」
ひそひそというには気持ちボリュームの大きな声で、楓が言う。ほとんどキスでき

そうな至近距離で、にやにやと見下ろしながら。

「ちょっと先生コンプレックスなんじやない？」

桔梗は大学の准教授をしていて、千海はそこの卒業生だ。

「…………」

もうつとした線で千海の唇が尖り、それからこちらはちつともひそめる気のない大きさで開かれた。

「それを言うなら」

「ん？」

白衣を着てる相手となら誰とでも寝る楓さんは、白衣コンプレックスなんじやないですか」

いつもざわざわと騒がしい会に、珍しく完璧な沈黙が訪れた。様子を見にリビングへ出て来た桔梗も、数歩歩いたところで完全に停止している。部屋の持ち主のドクターはチョコレートへ伸ばした手を下ろし損ねていて、その隣、ソファードで雑誌をめくっていた紫だけは、傍観者の余裕で脚を組み直している。

あんたねー、と楓が威勢よく口を開く前に空氣を動かしたのは、意外にも夕陽の小さな咳払いだつた。

2. That Day

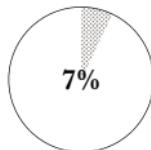
あこがれ



Kikyo



Luna



この季節、この教室で受ける二限目の講義は、いつも夢の中みたいにぼんやりとしている。

「まぶしい」

構内で一番大きな教室である本館二階の講義室は、いろいろと思い出のある場所だ。入学早々のオリエンテーションを受けたのもここだつたし、そもそも入学試験を受けたのもこのだだつびろい教室だつた気がする。

でも、ゴールデンウイーク中日に飛び込んできた平日の大講義室は、びっくりするくらい出席率が悪い。最前列から三列目まではもちろん空いているし、その後ろもぱらぱらとしか人が座つておらず、どの生徒も二席ごとに腰を降ろしている。

四月の半ばまでは、ぎりぎりに来ると席を探すのも一苦労で、少しでも遅刻してこうるものなら、新品のスカートの裾を気にしながら床に座るしかなかつたことを思うと、ずいぶんと快適な状態だ。やつと確保したそのスペースでさえ、まるでお花見の場所取りのようにこじんまりとしたもので、膝の上にその日のシラバスを載せたまま、九十分間ほぼ微動だにできなかつた。

そういうえば最初の講義のとき、ぱちんぱちんと隣で音がして、ちらりと見たら綺麗な顔をした女の子が爪を切つていてびっくりしたんだつけ。大学つていろんな人がいる、ということを知ったのも、この教室だつたようだ。

その当時は床に座つて見上げていた窓の外の新緑が、今はちょうど目線の高さで揺れている。二十三講義室最後列のいちばん右端は、私がいちばん好きな席だ。特にこの季節は、揺れる緑越しに古典映画のロミオとジュリエットに出て来そうな石畳のアプローチが見えて、耳に流れ込む教授の言葉もたおやかな詩のように聞こえる。

もつとも、うちの大学でこんな大きな講義室でやるのは必須科目の理数系だけなので、実際に耳に飛び込んでくるのは数式や定理、そして化学記号ばかりだ。一度紫を連れ込んだら「もはやわからなさすぎて音楽に聞こえる」と言われたけれど、これでも生粋の理系である私には一応ちゃんとした言語に聞こえる。

特に吉野先生の声は、女性にしては幾分低いアルトで、上滑りせずに脳に届く。真っ白な白衣、その中から覗く鮮やかなブルーのワンピースは、ほんの少しだけネイビーに振られた色味だ。相変わらず体温の低そうな講義だなあとぼんやりいちばん後ろの席で頬杖をついて眺めていたら、二つ前の席からだるそうにA4のシートが配られてきた。

久しぶりの小テスト。抜き打ちでテストをされるなんて、いつぶりだろう。

ここ一年で、すっかりシャープペンシルを持ち歩く習慣がなくなつたので、ショッキングピンクのFURLAのバッグからケイト・スペードのボールペンを取り出す。少しだけ考え、一気に解答欄を埋めていたら、ペンを持った手元が急に暗くなつた。

「お嬢さん」

きれいに整えられたオーバル型の人差し指の爪が、解答用紙の上をこつこつ叩いた。「当大学の学生以外の方は、受付でパスをもらつてくださいね」

「先生」

「こちらこら、取つてつけたようにそんな呼び方しても、もう学生には見えないわよ」
そう言つて、去年までは土日以外ほぼ毎日ゼミ室で顔を合わせていた指導教官は、人のバッグから学生証を入れていた定期入れを取り出した。

「会社はどうしたの？」

呆れた口調で首を傾げた元指導教官の手の中にある定期入れからは、肩のほとんどが出たトップスに身を包んだ学生証ではなく、もうだいぶ慣れ親しんだスーツ姿の社員証が覗いている。

++

「次回までにテキストの後半を通読しておくこと。それから、今的小テストの解答用紙は、それぞれこちらの教壇まで提出するようにな」

それでは、いいゴールデンウイークを、という挨拶で九十分の講義は終わった。ぱらぱらと周りの大学生たちが荷物をまとめ、教室を出て行く。潜り込んだのは一年生の必修科目の講義なので、さすがに周りに面識のある子はない。講義中は社員証の確認以上の追及を受けず、最後まで聴講していた私も小さく伸びをして立ち上がった。せつかくなので、解いた小テストの解答用紙を教壇まで提出に行くと、「この後、ゼミ室に来なさいね」と飴色の教壇のへりに腰かけて脚を組んだ不良教師が、横柄な角度で左眉を上げる。

「テストは満点だと思いますけど」

私は二十代始めのときに散々駆使した角度で、唇をとがらせて見せた。

「そうじやなきや、卒業させてません」

ぴしやりと冷たい一瞥が返ってきて、こつこつと今度は人の太ももを爪でたたく。「ストッキング」

促されるままに自分の脚を見下ろすと、たしかに膝下が見事に伝線していた。

「あ」

「替えをあげるから、部屋まで来なさい」

私の後ろから手を突き出した生徒の答案を受け取りながら、クールに見えて面倒見の良い准教授がため息をつく。自分でも綺麗に作れたと自画自賛するレベルの笑顔が、顔に浮かんだ。

「先生に呼び出されるの、久々ですね」

「私も久々だわ。生徒を呼び出すのは」

返ってきたのは、私がお手本にした本心を隠す綺麗な作り笑顔だった。

「最近の子はみんな要領がよくて」

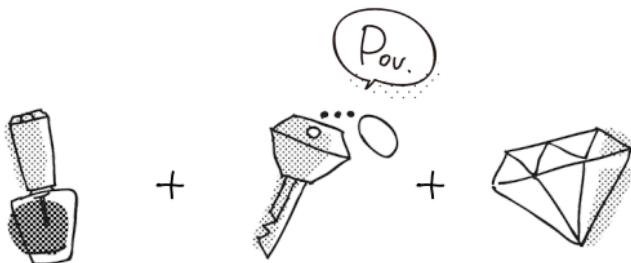
「ひどーい」

私も最近の子のつもりなんですけど、とこちらは素のテンションでクレームをつけると、「たかが平成一桁生まれの分際で図々しいんじやない?」という反論と共に、白衣の背中が会話の最中の私を置いて、さつさと廊下へと歩いて行く。

慌てなくともゼミ室の場所はわかっているけれど、久しぶりに歩く構内は一人で歩くには少しまぶしくて、ぱたぱたとその後ろを追いかけた。

3. Decade

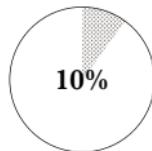
いつか晴れた日に



Yoko

Kurumi

Yuhi



「こんにちは」

からんと入口のベルが鳴つたときの常で、顔を上げるよりも先に挨拶を口にして、わたしはカウンターの中でめくつていた手元の書類に、矢印型のふせんをつけた。

大学病院併設の薬局というのは、常にルーティンワークを中断され続ける仕事だ。もちろん本来の用途で訪れる人もいるけれど、院内で迷つて道を聞きに来たお年寄りの道案内や、どこからかひとりで走り込んできた子どもを受け付けまで送り届けるために使う時間が意外に多い。働き始めてすぐに、何をどこまでやつていたのか忘れないために、いつも手元にはふせんを常備するようになつた。

挨拶を口にし、ほんの少しの差で顔も上げると、静かにこちらに歩いてきているお客様と目が合う。につこりしているのは、ずいぶんと珍しい来訪者だつた。

「こんにちは」

「……驚きました」

「ふふふ、くるみちゃんでも驚くのね」

「驚きますよ」

腕に日傘やら紙袋やらを下げた女の方は、ぜんぜんはしゃいでいない抑揚のなさで、どつきり大成功、と唱えてもう一度につこりした。

「でも、珍しいですね、遊佐さんがこちらにいらっしゃるなんて」

病院にMRがいること自体は、ちつとも珍しいことではない。でも、今となつては遊佐葉子が当院にいるのは少し珍しい事態だ。

遊佐さんは、もともと長い間、当院の担当MRだつた人だ。夕陽とわたしが揃つて新人だつたときから既にそうで、役付きになつてもしばらく担当を続けていたけれど、去年、下に初めて女の子が入つたことにより、最後の担当だつたこちらの病院もその千海瑠菜という新人に譲り渡して、今は完全にマネージャー業務をやつている。

だから、こうして職場で顔を合わせる機会は昨年までに比べると格段に減つた。今では、土曜日に開催される夕陽の家の気まぐれな食事会で会うのがほとんどだ。

「近くで打ち合わせがあつて。前を通つたら、懐かしくなつて入つちゃつた」

カウンターを挟んでにこにこしている年上の女の人が、白衣のくるみちゃんは久しぶり、と楽しそうに指摘して人の仕事着の襟を指先でなぞる。

その指先を払いながら、わたしは左手首にはめている腕時計に視線を落とした。

「もうちょっとでお昼休憩なんですけど」

「あ、お構いなく。すぐに帰るわ」

今度は人の白衣の胸ポケットに挟まつたペンを一本ずつ抜き差ししながら、いつも

「お茶だけもらつてもいい？」

「なんだか」

「なあに？」

「ちよつとくらくらしますね」

本当に五年前に戻つたみたい、と呟くと遊佐さんは笑つた。

「それじやあ、いつつもわたしがお茶をせびりに来てたみたいじやない」

「だつて、そうでしたよね」

担当時代、遊佐さんはびっくりするほど頻繁に、この薬局にふらりとやつてきていた。

MRに限らず、医者に用事がある人というのは、アポの時間の前後でなくとも、その医師の部屋の近くにつめているものだけれど、遊佐さんだけは、だつてそれじやあなんのためにアポ取つてるんだかわからないじやない、と言つて正確な約束の時刻まで、よくここで時間をつぶしていた。

もつとも、当時、今よりずつといつぱいといつぱいで、部屋の前でずらつと並んでいるお客様にうんざりしていた夕陽自体が、自室に戻る前によくここに寄つていたので、

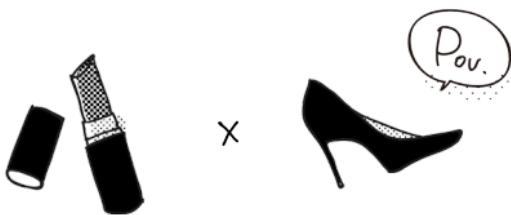
結果的にはアポの時間以外に夕陽と顔を合わせる機会がいちばん多かつたのは、たぶん遊佐さんだと思う。

「まだジャスマインティー置いてますよ」

待合のソファーにかけるよう促しながら、わたしは奥の準備室にお茶を取りに向かつた。

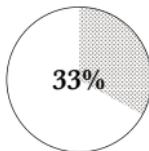
6. Sorry, but no sorry.

お気に召すまま



Kaede

Kikyo



「十一時か……」

椅子から立ち上がり大きく伸びをすると、ぱきぱきと首と肩が鳴った。終電で帰るなら、そろそろこの後の作業配分を考えた方がいい時間帯だった。大学から駅までは歩いて十分くらいだけれど、最後にもう一杯コーヒーを淹れることを考えると、開いたファイルの何個かは閉じ始めた方がいい。

ただ、コーヒーのことを思い浮かべると途端にそのことしか考えられなくなり、自動バッックアップが取られていることだけ確認し、私は先に席を立つことにした。

「とりあえず、お湯を沸かそうかな」

大学というのは、ひとりになるチャンスの多い場所だ。特にうちは教授がゆるい上に、全国を飛び回っているため、常識的な時間帯には、わたしはゼミ生たちを送り出して一仕事終えた後のコーヒーを飲んでいることが多い。

コーヒーを飲みながら音楽をかけることもあるし、自宅のものよりインチが大きいTVをつけることもある。

いちばんひとりになる確率が高いのは金曜日の夜で、金曜ロードショーがホラー映

6. Sorry, but no sorry.

画のときには、チャンネルは替えることにしている。ホラーが苦手なわけではないけれど、最近よく金曜の夜に、部屋の外から近づいてくるカツカツという音が、不気味に聞こえるのはいやだつた。

今日は水曜日なので、いつも通りのニュース番組を低くかける。でも、ポットを火にかけるのが少し遅かつたせいでかつかつと足音が聞こえてきた。

案の定、部屋の前でこつんとその足音は止まり、大きく一度ノックされた後にすぐがちゃりドアが外から開けられる。

「おー。まさかと思ったら、まだやつてる」

こちらが開けに行く前に勝手にドアが開き、騒々しい気配とそしてなんだか妙にいい匂いと共に、最近下手したら週二でふらつと遊びにくる松永楓が入ってきた。

入口に向かつて半歩出していた足を戻し、手元のガスをつけ、勝手にどしんとソファーに腰を降ろした相手に挨拶代わりの指摘を放り投げる。

「ヒール、修理したら？」

「ヒールは存在証明ですかね」

嫌味に自慢で返してきたMRは、ヒールなど必要がない身長と脚の長さをしている

ので、たしかに常に履いている七センチのヒールは、なにかしらの証明のようだつた。

「その証明、ちょっとさくない？」

「え？」

「いつもより三割増しでカツカツ言つてる」

そんなことないでしょ、と脚を組んで靴のヒールを点検した松永楓が、うわと大きな声を出す。